国

語

（解答番号 1 ～ 35）

2／L

2025年度 試験問題

国　　語

試験時間60分

〔注　　意〕

1．この問題冊子は指示があるまで開いてはいけない。
2．受験番号が正しく記入・マークされていない場合は０点となる。
3．解答はすべて解答用紙の所定欄にマークすること。例えば，問題文中に 10 と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号10**の**解答記入欄**の③に**マーク**すること。正しくマークされていない場合は採点できないことがある。

（例）

解答番号	解答記入欄（マーク）
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

4．問題冊子の各ページの余白は自由に使用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5．試験終了後，解答用紙は通路側に置くこと。なお，問題冊子は持ち帰ること。

〈マーク式についての注意〉

1．機械が読み取って採点するので，折り曲げたり汚したりしないこと。
2．マークはＨＢの鉛筆で枠の中を濃く塗りつぶすこと。
3．１つのマーク欄には１つしかマークしないこと。
4．訂正はプラスチック消しゴムでよく消し，消しくずはきれいに取り除くこと。
5．所定欄以外には何も書かないこと。

問題一　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

一般論として、私たちが誰かの外見を「特徴的」あるいは「異質」なものとして語る時、私たちは同時に、特徴的でも異質でもない「ふつうの外見」をパフォーマティヴに生み出している。何が「ふつう」とみなされるかは、歴史や文化によって大きく異なりうる。また、たとえ同じ社会の中であっても、住んでいる地域や階級（社会経済的位置）、民族や世代、普段どのようなサブカルチャーに接しているのか等によって、「ふつう」とみなされる外見の要素や特徴は異なる。つまり、［　イ　］。

それにもかかわらず、障害によって生じる外見上の違いは、時に本質的で固定的なものとみなされがちである。実際「〇〇という障害をもつ人たちは、こういう見た目をしている」という物言いや固定観念はいまだに強い。その一方で、近年、見た目からだけでは何の障害をもっているのか、さらには障害をもっているのかどうかを判断することが難しい障害者の存在が知られるようになった。(a)「見えない障害」は、そうした障害を捉えるためのフレームワークである。「見えない障害」をもつ人は、見た目上「ふつうの外見」をもっていると考えられている。このため、(b)ルッキズムを回避できている障害者として暗黙裡に想定されがちである。確かに、彼ら／彼女らは、「見た目問題」において典型的に語られる経験、たとえば見た目が人と違うからという理由だけで受けるいじめや差別、周囲の人たちが無遠慮に向けてくる言葉や好奇の視線を、比較的回避しやすい立場にいると言える。しかし、ルッキズムによって再生産・強化される「特徴的な外見」／「ふつうの外見」の階層秩序は、前者に括られた人たちに対してだけではなく、後者に括られた人たちに対しても、異なる形態の(1)ヨクアツをもたらしうる。ルッキズムは前者を「特殊」で「異質」なものと意味づけ、その価値を貶めるだけではなく、後者の間に存在する多様性を無視し、特定の人たちの存在等を否定するという二重の機能をもっているのである。

その一例として、「障害があるように見えない」という言明について考えてみよう。私たちの社会において、この言明は相対的にポジティブな意味を含んだものとして通用している。つまり、それは「他の人と同じように、何の問題もないように見えること」を表明する言葉として、あるいは障害者に対する褒め言葉として（「障害があるのに、こんなことまでできてすご

い」という形で）使われたりする。だが、こうした使用方法が可能になっていること自体が、私たちの社会において、障害があることを「問題」として否定的に捉える価値観が当然視されていること、さらには「障害者はできないことが多いから、特別にいろいろしてあげなければならない」という差別的・侮辱的な思い込みが存在していることの反映でもある。

［　ロ　］

実際、「見えない障害」をもつ人の多くが、障害者として名乗り出ても、それを信じてもらえなかったという苦い経験をもつ。「見えない障害」をもつ人に対して向けられるこうした疑いのまなざしは、(c)なぜ、どのようにして生じるのだろうか。この点について、メーガン・ジョーンズの事例を手掛かりに考えてみたい。

ジョーンズはアメリカ合衆国の、ある大学の博士課程に在籍する、弱視難聴の女性である。ふだん介助者を同伴せず、大体のことはひとりでやっている。そのせいか、周りからはよく「障害があるようには見えない」と言われる。以前、大学に対し、自分の調査やクラス内でのディスカッションを補助してくれるアシスタントをつけてほしいと要望した時も、「障害があるようには見えない」という理由で断られたことがある。ある日、彼女はショナという名前の聴導犬を手に入れた。ショナはシェパード犬そっくりだが、体重が一五ポンド（約六・八キロ）しかない。公共の場に行くときは、黒い文字ではっきりと「耳の聞こえない人のための聴導犬」と書かれたオレンジ色のケープを着けている。ショナを連れて歩き始めると、街の人たちから「まあ、なんて小さくて可愛らしい盲導犬でしょう。訓練中ですか？」と話しかけられたり、「この犬は盲導犬ではないから、建物から出て行ってほしい」などと言われたりと、誤解にもとづく反応を受けるようになった。こうした反応に嫌気がさしたジョーンズは、ショナと出かけるときには、これまで夜に出歩くとき以外は必要としていなかった白杖を持つことにした。すると、街の人たちの反応ががらりと変わった。ジョーンズを見かけると、人びとはすぐに「白杖を持ち盲導犬を連れた視覚障害者(2)キンキュウ非常モード」に切り替わるようになったのだ。

この事例は、障害の有無を判断するときに私たちが無意識的に依拠している認識枠組みについて示唆を与えてくれる。「障

害があるように見えない」という言明が端的に示しているように、私たちの多くは「障害があるかないかは、見た目でわかるはずだ」とどこかで思い込んでいる。つまり、特定の障害と特定の、しかも可視的な印を対応させることで、障害の有無を判断しているのである。たとえば、私たちが誰かを視覚障害者として判断するのは、単にその人が白杖を持って歩いているからだったりする。白杖同様、「特徴的な外見」もそうした可視的な印のひとつとして(3)ドウインされる。「あの人の顔つきが他の人とちょっと違うのは、○○障害があるからに違いない」といったように。

もちろん、(d)こうした認識枠組み自体を差別的だとか否定すべきだと断定することは難しい。だが、それが疑う余地のないものとして前提とされている場合、「白杖を持って歩いていないので、あの人は「本物の」視覚障害者ではない」とか「本当に○○障害だったら、こういう見た目をしているはずだ」といった誤解や思い込みが強化されやすいとは言える。実際ジョーンズは、制度的には視覚障害者であるにもかかわらず、ふだんは白杖を使用していなかったため、周りから「障害があるように見えない」と言われていた。

以上の議論からわかるように、障害に対して疑いのまなざしが生じる一因は、特定の障害と特定の可視的な印との間に固定的な対応関係を見出す認識枠組みにある。つまり、「見えない障害」とは、人びとが障害の有無を判断するために必要としている可視的な印がない障害のことを意味する。こうした障害の場合、たとえ本人が「障害がある」と述べたとしても、人びとは、そのようにして与えられた言語的な情報と、相手の一見「ふつうの外見」を通して自分が得ている可視的な情報との間に不一致を感じる。この時、「障害があるかないかは、見た目でわかるはずだ」という思い込みが強ければ強いほど、人びとは可視的な情報ではなく言語的な情報の方を疑うことで、その不一致を解消しようとしてしまうのである。

また、先の事例は、私たちが障害の有無を判断する際に手掛かりにしている可視的な印が、非常に限定的であることも教えてくれる。ジョーンズが聴導犬のショナを連れて街を歩くようになったときのことを振り返ってみよう。ショナが聴導犬のマークを着けているにもかかわらず、街の人たちはジョーンズのことを「盲導犬を訓練している人」として、あるいは「偽物の「盲導犬」を連れて歩いている人」として認識していた。どちらの反応においても、ジョーンズが聴導犬によるサポートを必

要としているという重要な事実が見落とされてしまっていた。

このことは、たとえ可視的な印（この場合は、聴導犬）が物理的に存在していたとしても、それが障害に対応した印として認識されるかどうかは、見ている側次第であることを示唆している。つまり、障害の有無の判断は、単純に可視的な印の有無に依存しているのではなく、(e)そうした印に関する人びとの知識や理解可能性に大きく依存しているのである。このことを踏まえると、「見えない障害」とは、その人の障害が隠れた状態にあるというよりは、障害の有無を判断する側にとって理解可能な印がない状態にあることを指すのだといえる。

（飯野由里子「『障害があるように見えない』がもつ暴力性」による。一部改変）

【出典：「障害があるように見えない」がもつ暴力性―ルッキズムと障害者差別が連動するとき「現代思想２０２１年11月号　特集＝ルッキズムを考える」所収】

問一 傍線部（1）～（3）の片仮名に該当する二つの漢字と同じ漢字を使うものとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 1 ～ 6

（1） 1

① ヒョクな大地
② 飛行機のビョク
③ 私利ショクに走る
④ ヨクヨウをつけて話す

ヨク　アツ

2

① アツい本
② アツい夏
③ アツレキが生じる
④ アツリョクに屈する

（2） 3

① キッキンの課題
② キンコウを保つ
③ キョウキンを開く
④ キンショウな金額

キン　キュウ

4

① フキュウの名作
② 試験にキュウダイする
③ 生活がヒンキュウする
④ セイキュウに事をはこぶ

（3） 5

① 公私コンドウ
② 気がドウテンする
③ ドウドウたる態度
④ 仕事がキドウに乗る

ドウ　イン

6

① インドウを渡す
② 道路のフクイン
③ インネンをつける
④ 第一インショウが良い

問二 空所イに入る文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 7

① 「特徴的な外見」と「ふつうの外見」の境界線は同一の文化圏内に限っては明確である
② 見た目が「特徴的」であろうと「ふつう」であろうと人は平等に扱われなければならない
③ 何が「ふつう」で何が「特徴的」なのかを決定する絶対的な基準が予め存在しているわけではない
④ 「特徴的」とみなされる要素と同様に「ふつう」とみなされる要素も歴史や文化がつくり出したものではない
⑤ 同じ観察者でも、相手をどの角度から見るかによって「ふつう」も「特徴的」となりえ、またその逆もある

問三 波線部（a）をもつ人が受ける対応の説明として**適切でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 8

① 「特徴」のなさゆえに存在等を否定されることがある。
② 「障害があるように見えない」などの褒め言葉を受ける。
③ 可視的な印を身に着ければ周囲が適切な対応をしてくれる。
④ 直面している困難やそれによって生じているニーズを理解してもらえない。
⑤ 「障害を言い訳にして、怠けようとしているだけなのではないか」などと疑われる。

問四 波線部（b）に関する、本文に即した説明として**適切でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **9**

① 見た目をめぐる上下関係を形成する。
② 障害者に対する誤解に満ちた反応を誘発する。
③ 外見からはわからない障害を目に見えるものにする。
④ 特徴のない外見をした人びとがもつ多様性を見えないものにする。
⑤ 「異質」な見た目をもつ人に対する周囲の人の無遠慮な態度を誘発する。

問五 空所ロには次のA～Cの文が入る。これらを文脈に沿って前から順に正しく配列したものとして最も適切なものを、後の①～⑥の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **10**

A 車いすユーザを目の前にして「本当に障害があるのだろうか。本当は歩けるのに、大げさにふるまっているだけではないか」と疑う人は少ない。

B 他方、「見えない障害」として知られる発達障害や精神障害のある人を前にして「本当に障害があるのだろうか。障害を言い訳にして、怠けようとしているだけではないか」と、疑いのまなざしを向ける人は意外と多い。

C 他方、障害者の立場に立ってみると、「障害があるように見えない」という言明は、「だから何の問題も生じていないはずだ」とか「だから特別なことをしてあげる必要はないはずだ」といった形で、自分が直面している困難やそれによって生じているニーズを過小評価したり否定したりする機能をもつことがあるため、厄介である。

① A → B → C　② A → C → B　③ B → A → C
④ B → C → A　⑤ C → A → B　⑥ C → B → A

問六　波線部（c）の「なぜ」「どのようにして」への解答として最も適切なものを、それぞれの選択肢群の①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 11 ・ 12

【「なぜ」に関する選択肢群】 11

① 障害があることは「問題」であるという否定的な発想に人びとがとらわれているため。
② 特定の障害者は特定の外見をしているはずだという思い込みを人びとがもっているため。
③ 障害者かそうでないかの違いは、必ずしも固定的なものではないという認識が共有されているため。
④ 「障害者にはできないことが多いから、特別にいろいろしてあげなければならない」と人びとが考えているため。
⑤ 異質な外見をしている者は、他者の無遠慮な言葉や好奇の視線の対象になっても仕方ないという発想を人びとがもっているため。

【「どのようにして」に関する選択肢群】 12

① 「他の人と同じように、何の問題もないように見えること」に価値を置くため、「見えない障害」をもつ人も存在するという主張を疑う。
② 自身のイメージ通りの外見をしていない障害者を人びとが目の前にした時、障害者であることを説明されても、自身のイメージのほうが正しいと考え、説明のほうを疑う。
③ 「〇〇という障害をもつ人たちは、こういう見た目をしている」という言語情報を重んじるあまり、「見えない障害」をもつ者であっても何らかの「障害の印」があるはずだと疑う。
④ 人びとが「大体のことはひとりでやっている」障害者に出会った時、「特別にいろいろしてあげようとしたのに、自分には出番がない」という不満をもち、その不満から相手は本当に障害者なのかと疑う。
⑤ 「障害があるのに、こんなことまでできてすごい」という「見えない障害」に対する賞賛の念をもつ者ほど、その発想は差別的・侮蔑的な思い込みの裏返しであるという指摘から目を背けるため、障害者のほうを疑う。

問七　波線部（d）に基づく反応として**該当しないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 13

① ショナのケープを見てジョーンズには聴覚障害があると知る。
② ジョーンズの見た目から「盲導犬を訓練している人」と見なす。
③ 「障害があるようには見えない」という理由でアシスタントの提供を断る。
④ 大体のことはひとりでやっている様子からジョーンズには障害がないと判断する。
⑤ ジョーンズの白杖を見て、「白杖を持ち盲導犬を連れた視覚障害者」に対応しなければという気持ちになる。

問八　波線部（e）を説明する事例として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 14

① 白杖を持ち盲導犬を連れた人を見て「あの人には視覚障害がある」と理解すること。
② 障害には「見えない障害」もあることを理解したうえで、障害者が必要とするサポートを人びとは提供するべきだということ。
③ 犬に着けられたケープの文字を正確に読み取り、知識を用いて、その犬が聴導犬か盲導犬かその他の犬かを判断するということ。
④ 聴導犬が物理的に存在していたとしても、それを聴覚障害の印として理解できるかどうかは理解する側にかかっているということ。
⑤ 「〇〇という障害をもつ人たちは、こういう見た目をしている」という可視的な印に関する知識をできるだけ多く蓄え、理解の幅を広げるということ。

問九 本文の内容に即した記述として最も適切なものを、次の①～⑧の中から**二つ選び**、マークして答えなさい。ただし、解答の順序は問わない。 15 ・ 16

① 発達障害や精神障害は見た目上「ふつうの外見」をもっているため、いじめや差別を受けることはない。

② 障害があることを「問題」とみなす視線があるからこそ、「自立」しているように見える障害者を賞賛する感性が生まれる。

③ 人びとは「可視的な印」を手がかりに他者の障害の有無を判断するが、これを重視しすぎると別の情報を見逃すことになる。

④ 最近、「見えない障害」をもっている人の存在が知られるようになった。こうした障害者には特別なことをしてあげる必要はない。

⑤ 「ふつうの外見」を構成する要素や特徴は文化によって異なるが、「特殊で異質な外見」を構成するそれはどんな文化においても共通している。

⑥ ショナを建物から追い出した人物は、ショナが聴導犬であることを理解したうえでそのような行動に出た。聴導犬の存在を周知することが必要だ。

⑦ ある症状には、それに対応する「印」があるという信念があるからこそ、私たちは支援を必要とするすべての障害者に適切なサポートを届けることができる。

⑧ 白杖や「特徴的な外見」は、障害者に対する人びとの対応を変え、支援を引き出す働きをする「印」である。したがって、私たちはこうした印に敏感にならなければならない。

問題二 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

科学は自然のなかに存在する対象を分析し、そこから法則を イ し、対象を分析的に ロ するというところに中心があった。こうして法則が確立されると、つぎの段階として、これらの法則の新しい組み合わせを試みることによって、それまで世界に存在しなかった新しいものをつくりだせる可能性があることに、人々は気づいたわけである。

法則を組み合わせて、実験をしてみて、もとの対象が ハ できることを確かめるところまでは、科学の領域であろうが、法則をいろいろと新しく組み合わせて何か新しいものをつくっていくというつぎのステップは、シンセシス、あるいは合成・創造の立場であり、それが現代における技術であるということができる。つまり、現代技術は科学の法則を意識的にあらゆる組み合わせで使ってみて、何か新しいものをつくりだしていこうとする明確な意図をもったものとなっていて、これが従来の技術とは明確に異なっているところである。

このように分析と合成とは[a]対概念となり、したがって科学と技術も対概念であり、コインの裏表の関係であると理解される。そこで、これら全体は科学技術という一つの概念、一つの言葉としてとらえることができるだろう。

科学と技術はまったく異なる概念で、科学技術という表現は適当でないという考え方をする人もいる。しかし、現代科学は高度の技術なしにはありえず、その技術も科学によって支えられている。今日では、科学者自身がシンセシスの領域に本格的にのりだしてくる一方で、技術者のほうも、技術を押しすすめるために本格的な科学的基礎研究をおこなっている。

こうして、科学と技術の境界は判然としなくなってきているうえに、何か新しい発見があると、これがただちに技術の世界に使われて新しい発明につながり、これがまた基礎研究にフィードバックされるという、ひじょうに速いサイクルをえがく時代になっている。そういった状況からも、これら全体を科学技術と呼ぶのが適当であるというわけである。

二〇世紀の技術は、それ以前の技術とはまったく異なるものである。昔の技術は、アート（art）という言葉がしめすように、その道の専門家の直観と努力によって磨きぬかれた技芸であり、芸術にせまる何ものかであったわけで、科学とは何の関

係もないものであった。ところが、二〇世紀における技術は、科学によって確立された対象についての法則を、意図的、体系的、網羅的に組み合わせて用い、 Ⅰ というものである。これが現代技術のもつきわだった特色である。

たとえば化学においては、一九三六年に高分子の構造が明らかにされ、この理論にもとづいて、ナイロンが発明されて以来、高分子合成工業が強力に推進され、新しい物質がつぎつぎとつくりだされてきた。新しい薬品なども同様の考え方でどんどんとつくられている。宇宙科学も、一九五七年のスプートニク以後の発展は目ざましく、今日では宇宙空間に人が住む場所を建設するというところにまできているわけである。原子力発電はいうまでもない。

最近のもっとも注目すべきことは、ＤＮＡの存在の確認と、遺伝子とその意味の解明がすすみ、多くの生物の遺伝子構造が明らかにされはじめていることである。その結果、遺伝子工学と呼ばれる分野が形成され、遺伝子組み換えなどをつうじて、新しいタンパク質を合成しようとする生命情報科学の時代に入っていこうとしている。過去半世紀間に科学技術が膨大な数の新しい物質をつくりだしてきたように、遺伝子工学はこうして Ⅱ に存在しない生物をどんどんとつくりだそうとしているのである。

このように見てくると、今日の科学技術のほとんどあらゆる分野が、アナリシス（分析・解明）の時代からシンセシス（合成・創造）の時代に入っていきつつあると考えられる。したがって、二〇世紀を科学の時代というならば、二一世紀はシンセシス中心の科学技術の時代となることはまちがいない。

そこで、一つの大きな問題が浮かび上がってくる。これまでの科学は、神が創造した地球と自然、そしてそこに存在する物を観察し、理解するということをおこなってきた。そのかぎりにおいて、科学は①ケンキョであり、科学は価値中立であるとされてきた。しかし、神のみがもっていたものごとを創造する秘密を、今日私たち人間が手に入れ、あらゆる法則を無原則的に組み合わせて、できることは何でもおこない、どんどんと新しいものを勝手につくりだしつつあるわけである。そして、それらはけっして地球と自然、生物や人間にとってよいものばかりではない。一見よいものと見えても、長期にわたってながめてみれば、深刻な問題をもたらすものもたくさんつくりだしているのである。

（長尾真『「わかる」とは何か』による）

問一 傍線部（1）の片仮名に該当する二つの漢字と同じ漢字を使うものとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 17 ・ 18

（1）

17

① 幸福に生きるケンリ
② ケンゼンな生活を送る
③ 地域にコウケンする
④ ケンジョウの美徳を重んじる

ケン

18

① 主張のコンキョを問う
② キョジツを混ぜて語る
③ 新しい家にテンキョする
④ 執筆者のキョダクを得る

キョ

問二 空所イ～ハに入る語の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 19

	イ	ロ	ハ
①	理解	発見	創造
②	抽出	理解	復元
③	創造	抽出	理解
④	復元	創造	発見
⑤	発見	復元	抽出

問三 波線部（a）の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **20**

① 互いに対照的な要素をもち、一方が言及される場合には自ずと他方が前提となる関係にある概念
② 同一の類に属する概念のうち、対立度や差異が最も大きい関係にある概念
③ 互いに他を否定しあい、両者の中間にあたる概念が存在しない関係にある概念
④ 意味は類似するが、含む範囲に違いがあるため、両者を一組として用いることで意味が十全となる関係にある概念
⑤ 両者を切り離すと意味が成立しなくなるため、二つを一組にして用いられる関係にある概念

問四 空所Ⅰに入る記述として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **21**

① 専門家が昔から磨きぬいてきた技芸をより多くの人が学べるようにする
② これまで人類がつくってきたものをより良いものへと改良する
③ 科学的な分析をこれまで以上に進めていく
④ 新しいものを手当たりしだいにつくりだす
⑤ 私たちが日常生活で用いるものを開発していく

問五 空所Ⅱに入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **22**

① 理論的　② 自然界　③ 物質的　④ 歴史的　⑤ 動物界

問六 本文の内容に即した記述として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **23**

① 科学と技術が結びつくことによって、人間はこれまでに無かった新しいものをつくりだす力をもったが、それは自然と人間にとって深刻な問題をもたらしかねない。
② 科学は価値中立的に進歩するものだが、現代は、技術が科学を恣意的に利用して新しい物質や生命をつくりだす時代になっており、生物や人間にとって深刻な問題になろうとしている。
③ 科学の成果を技術に応用することが新しい発明につながり、それがまた科学の基礎研究にフィードバックされるというサイクルが速くなったことで、人間は大きな利益を得られるようになった。
④ 人間が新しい物質や生命をつくりだそうとすることは、神のみがもっていた創造の秘密を侵害し、人間の未来に危険をもたらすから避けるべきだ。
⑤ 科学技術のあり方が深刻な問題になっている今日、昔の技術は、専門家の直観と努力によって磨きぬかれた技芸であり、芸術にせまるものであったことを改めて思い起こすべきだ。

問題三　次の各問に答えなさい。

問一　文意が一通りに限定されるものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 24

① 毎日父が庭で作っている野菜をよく食べている。
② 先週末は初めて訪れた隣町の美術館で展覧会を観た。
③ 私は先月山田君が留学のためカナダに行ったことを彼の母親から聞いて知った。
④ 最近話題のあの動物園で生まれたトラの赤ちゃんの名前は、公募で決めるらしい。
⑤ 父は昨日魚の干物をお土産に買ってきてくれた。

問二　（1）～（3）の文の【　】に入る語として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 25 ～ 27

（1）土壇場で獅子【　】の活躍を見せてくれた。 25
① 粉塵　② 奮迅　③ 憤刃　④ 噴尽　⑤ 紛陣

（2）今度こそ勝利を手にしようと、新しい指導者のもと試合に臨んだが、【　】たる結果に終わった。 26
① 残念　② 厳然　③ 微々　④ 峨々　⑤ 惨憺

（3）おかげさまで、大変【　】ある一日を過ごすことができました。 27
① 意義　② 意議　③ 異議　④ 異義　⑤ 威儀

問三　慣用表現を用いた（1）～（5）の文の空所に入る語として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 28 ～ 32

（1）このタイミングでの社長就任は、火中の［　］を拾うようなものだ。 28
① 芋　② 銀杏　③ 栗　④ 豆　⑤ 石

（2）交渉の席での彼は、常に胸に［　］ありそうな様子に見える。 29
① 悪銭　② 一葉　③ 溜飲　④ 一声　⑤ 一物

（3）祖父のご近所さんは、祖父の家に寄っては五時間以上もお喋りをして帰る。［　］が長い人だ。 30
① 尻　② 腰　③ 足　④ 腕　⑤ 肝

（4）最近は、似たようなアイドルが次から次へと出てくる。まさに雨後の［　］だ。 31
① 茸　② 筍　③ 苔　④ 蝸牛（かたつむり）　⑤ 蚯蚓（みみず）

（5）彼の演説は好評だったが、その後の食事会で気が緩んだのか、うっかり本音を漏らして［　］を露わした。 32
① 鼻　② 尻尾　③ 魚の目　④ 白袴　⑤ 馬脚

問四 （1）～（3）の傍線部（a）～（c）について、表記または言葉の使い方の正誤の説明として最も適切なものを、それぞれ①～⑧の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 33 ～ 35

（1）彼が(a)受け負った工事はいつも評判が良いので、(b)猫も釈子も彼に仕事を(c)依頼するようになった。 33

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない

（2）父は(a)昔気質で(b)頑固だが、腕は確かで、日本でも(c)五本の指に入るほどの職人だ。 34

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない

（3）準決勝では、前半は両者(a)互格の戦いだったが、ゲーム中盤でAチームが(b)無暴な攻撃を仕掛けて一点を先取し、優位に立った。しかし後半ではスタミナが切れてミスを連発した。忍耐強く(c)虎視淡々と反撃の機会をうかがっていたBチームが、後半で一気に逆転したのだった。 35

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない